

青山 弘之

概念をめぐる戦い——中東を苛む危機はそう呼ぶことができるのかもしれない——

中東は近代以降、諸々の紛争、危機の渦中に身を置いてきたが、二一世紀に入ってから混乱ぶりは目を覆うほどだ。イラク戦争、杉の木革命（レバノン）、三度にわたるガザ紛争、「アラブの春」、そしてリビア、シリア、イエメンでの内戦や「国家崩壊」など、例をあげればきりがない。

この混乱は、アル・カーイダの系譜を汲む組織の「ヴァージョン・アップ」を誘発、「アル・カーイダよりも残忍」などといわれたイスラーム国や、アル・カーイダであることを否定し、「革命家」の「フリ」をするシャーム・ファトフ戦線（旧ヌスラ戦線）を台頭させた。中東には世界中から戦闘員が参集する一方、多くの難民・移民が周辺諸国や欧米諸国に押し寄せ、世界中がテロ拡散の脅威に怯えている。

他方、トルコ、イラン、サウジアラビアといった国々は、こうした状況を利するかたちで域内大国としての存在感を強めた。イスラエルも混乱を「いなす」ことで安全保障体制を強化している。だが、これらの「勝ち組」でさえ不確実な未来に向き合っていることは、「ビジョン二〇三〇」を策定し、変革を模索するサウジアラビアをみれば明らかだ。

中東の混乱は、「テロとの戦い」「民主化」「宗派対立」といったパラダイムのなかで捉えられることが多い。だが、域内諸国やそれを取り巻く諸外国の国益や安全保障は、こうしたパラ

ダイムやそれによつて諸概念が、字義どおりに体现されることを決して許さない。

テロ、レジスタンス、主権、人権、自由、体制（反体制）、神性、神意——これらの概念から作り出される「正義」は、政敵を貶め、欺き、そして干渉を自己正当化するプロパガンダに過ぎず、まったく同じロジックのもとで、それぞれ異なった利害を追求する当事者たちが非妥協的な対立を続けることが、事態を複雑で難解なものとしている。イラクとシリアでイスラーム国に対する「テロとの戦い」を行うと主張する当事者たちの同床異夢と傍若無人ぶりがまさにその典型だ。

むろん、こうした状況は今に始まったものではない。しかし、中東情勢を観察する専門家が、それを報じる記者、そして彼らが発信する情報に意識的、無意識的に触れる人々のなかには、このことに気づかないまま、プロパガンダに囚われ、現実がみえなくなってしまう者もいる。そして、こうした思考停止状態こそが「アラブの春」以降の中東を迷走させる「外的」な原動力の一つになってしまっている。

中東政治を説明する際に安易に引き合いに出される諸概念に振り回されることなく、背後にみえ隠れする政治の実態を冷静且つ徹底的に読み解くことが、これまで以上に求められている。本特集がそのことを再確認するための新たな起点となることを願ってやまない。

あおやま ひろゆき／東京外国語大学 教授

1968年東京生まれ。東京外国語大学卒。一橋大学大学院修了。1995～97年、99～2001年までシリアのダマスカス・フランス・アラブ研究所（IFPO、旧IFEAD）に所属。JETROアジア経済研究所研究員（1997～2008年）を経て現職。専門は現代東アラブ地域の政治、思想、歴史。編著書に『混迷するシリア：歴史と政治構造から読み解く』（岩波書店、2012年）、『「アラブの心臓」に何が起きているのか：現代中東の実像』（岩波書店、2014年）など。ウェブサイト「シリア・アラブの春顛末記」（<http://syriaarabspring.info/>）を運営。